

「岡山朝日」誕生!! ～男女共学始まりのエピソード～

母校は今年11月21日、創立150周年を迎えます。岡中、一中、一高、二女、二女高時代が75年、岡山朝日となって75年という特別な年です。そこで岡山朝日の「始まり」に焦点を当ててご紹介したいと思います。



原版白黒写真を平成12年卒富岡誠さんがデジタルで着色

昭和24年10月8日 岡山朝日高校開校式(対面式)

開校式(対面式)



代表の河合氏と榎並氏
(上写真中央部拡大)

見ている側も緊張してくる。

上の写真は1949年(昭和24年)10月8日に行われた開校式(対面式)の一コマ。

同年8月31日、岡山県立岡山第一高等学校と岡山県立岡山第二女子高等学校が統合されて岡山朝日高等学校となり、形のうえでは「男女共学」になったものの、実質的には何も変わることなく、それぞれ内山下校舎、中山下校舎(と呼称のみ変更)に分かれて授業をしていた。この日、内山下校舎(岡山城本丸内)の式典で男女

生徒が初めて一堂に会して「対面」した。

一段高い階段上で対するのは河合卯平氏と榎並英子氏。このときのエピソードを後に榎並氏が「鳥城」140号(昭和59年9月発行)に寄稿している。

「(前略) 校長先生のお話のあと、一段高い壇上に立って男子の代表のあいさつになったが、彼が奉書に墨書きした「あいさつの辞」の包みをおもむろに出して開き始めたのを、私は息のつまる思いで見た。きちんと清書したあいさつに続いて、ノートの切れ端に走り書きした原稿をそのまま出して読むことなどできないし、だからといって今更どうにもならない状況の中で、男子代表のあいさつなど、もう私の耳に入るところでなく、ただ時だけが容赦なく過ぎていった。

女子の番になった時、致し方なく私は、ノートの切れ端に書いたことばを思い出しつつ、あがりっぱなしの精神状態で、何をしゃべったのかもわからずにあいさつを終えた。そのあと、男女生徒はお互いに中央に向かいあってお辞儀をして対面式は終わったが、あの時の心情を思うと三十五年過ぎた現在(寄稿当時)でも、穴があったら入りたような気分になる。しかしその失敗も、実状をご存知ない先生方は、全く逆の状況で考えて下さっていた。

内山下校舎の、当時はいわゆる“天下の一中”の先生が、「女子でもあんなすごいのがいるのか」と感心していらっしやったということで、中山下校舎の先生方は胸を張って帰っていらしたとの北村先生のお話には、私はまさかノートの切れ端の件は今更言えず、小さくなって先生のお話を伺っていた。

男女共学の端緒はこうであったが、当時、番町線が通っていた市電に、城下で乗り替えのために電車を待っている時など、男子生徒が私を見ると互いに突っつきあいながら、「あいつじゃ」と言っているのを耳にするたびに、私は赤面しながらうつむいて、なるべく遠く離れて過ごした。現代からみれば、男女共学も隔世の感一入である。」

結局、当時3年生だった榎並氏は実質的な男女共学を経験することなく、朝日高校というよりは二女の延長のような形で卒業された。男女共学など実質的な統合が進んだのは1950年(昭和25年)4月、1年生は中山下校舎、2・3年生は内山下校舎で学ぶようになった。同年9月、旧制第六高等学校跡(国富校舎)を使用可能となり、まずは3年生が国富校舎に移転、1953年(昭和28年)8月にやっと全学年が現在の校地に揃った。

(注: 国富校舎とは現在の校地である)